

## 矢吹慶輝の社会事業

田山令史（佛教大学）

矢吹慶輝(1879-1939)は敦煌学者、宗教学者として先進的な仕事を残した。随の時代、邪教として排斥され経典も散逸していた三階教を、敦煌写本をもとに精査し『三階教之研究』として出版する(1927)。3世紀のペルシャに現れて異端とされ、やはり経典が失われていたマニ教を、敦煌写本から見いだされた漢訳経典に基づいて研究した。『大正新脩大蔵経』(1924-1934)第85巻も矢吹の敦煌学が基礎にある。一方で矢吹は、1925年に東京帝国大学助教授を辞して東京市社会局長となり、1922年よりの三輪学院に加えて、社会事業の実践にも深く関わった。三階教もその社会的実践力が矢吹の興味を引いたと思われる。このような仏教と現実の統合は今、「社会的仏教」とも呼ばれる。

矢吹は社会的仏教を「社会」についての先端的議論に依りながら厳格に根拠付けようとする。社会事業に関する矢吹の論文を貫く特徴は同時代性である。20世紀前半、同時代西洋の社会論を周到に引用しながら、仏教を当時の世界と問題を共有しその解決を目指す一宗教と位置付ける。ここで仏教は、社会科学を援用して現代生活に対処しながら理想社会へ進もうとする「社会的宗教」の一つとなる(「社会的宗教」)。矢吹はこの社会的宗教の意味を、宗教一般が社会性を含意すること、つまり社会性は宗教が宗教たる不可欠の要素であることに見て取る。

宗教の社会性をめぐって矢吹は、F.G.ピーボディ、R.B.ペリー、É.デュルケムなど、多くの哲学者、社会学者に言及する。ペリーは、古代より現代へと変遷する「社会」概念が今は「生物学的心理学的」に根拠付けられると主張する。これを受け、矢吹はこの「科学的根拠付け」からして人は本来、社会的であることに注目する。

ここで矢吹にとって決定的な思想はデュルケムの社会論である。広範囲にわたってデュルケムを引用している。焦点は「超個人的生活」「超個人的理性」である。社会は単に個人の集合体ではなく個人の中の、個人を超える社会性を前提する。デュルケムに従って「一語でいへば吾等の中に超個人性が存在しているといふことは實は吾の中に社会的の或者(社会性)があるといふことである」(「哲學の社會化」)。さらに科学と宗教はその普遍性への志向で一致している。デュルケムはこのような、個人の個人以上のものへの服従の意志を社会性とするので、科学と宗教に共通する社会性を明示する。矢吹はデュルケムの社会概念に、個人と社会、科学と宗教の統合、すなわち社会的宗教を見るのである。

敬虔な浄土宗徒として矢吹は、社会的宗教の一つである大乘仏教による社会事業に奔走した。発表ではその事業論を検討しながら、併せてデュルケム解釈の問題点も指摘する。

以上

<キーワード> 社会的仏教 科学 デュルケム